
氷の村とミイナ

河合ひさとし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の村とミイナ

【Nコード】

N4133X

【作者名】

河合ひさとし

【あらすじ】

氷に覆われた島に住んでいる2人の主人公は、島の遺跡にいたミイナという女の子と一緒に、居なくなった村の人を探す旅に出ます。

洞窟の石像

「寒いなあ…」

氷の浮かぶ海を眺めて呟く。呟いた息も真つ白で地面も雪が積もっていて白いのに、まだ雪は降り足りないらしく大粒のものが次々と落ちてきている。見上げると、空は真つ黒くて見ているだけで気分が沈んでくる。

（あの海の間こうはどうなってるんだろう…。ずーっと氷なんだろうか…。それとも、本で読んだみたいに森があったり砂漠があったり、街があったりするんだろうか…）

「今日は何か見えた？」

後ろから話しかけてきたのはメロン。小さな村で一人だけいる同い年の女の子で、村の中ではお金持ちの家の子。

「見えないよ。いつもどおり」

「帰ろ」

そっけない態度で、こっちの反応を待たずにスタスタ歩きだす。

僕もついて行く。

（呆れられてるかな…。最近毎日来ているから…）

「僕…いつか海を渡りたいな。海を渡って陸地を探してみたい」

「ソウデスカ、イケルトイイデスネ」

（棒読み…）

メロンは全く関心を示さなかった。

村に戻ると、ちょうど父さんが魚を村に運んできているところだった。

「おー、レオ。ちょっと手伝ってくれないかー？」

「うん…。それじゃ、メロン」

「ばいばい」

メロンと別れて、父さんと一緒に魚を運びに行く。

(また同じことの繰り返しか…)

「どうしたーレオ。浮かない顔して」

「ん…。海の向こうの街にさ、いつか行きたいと思ってね…」

「大人になったら行ってきな、もうあと5年じゃないか」

「うん…。そうだね」

(長いなあ…。退屈なんだよ…)

村を出れる年齢というのが決まっている。5年。それまでがとても長く感じる。この村であと5年。

手伝いが終わって自分の家に入り、2階の自分の部屋へ。ライトを点けようとするが点かなかった。蓋を開けてみると鉄の筒が2つ出てきて、手の中で転がす。

(…燃料が無くなったんだな…まだ重いのに)

大陸では、地面の中とか遺跡からちよくちよくこういう便利なものが出てくるらしい。開けて調べている人たちもいるらしいけど、まだまだ分からないことだらけだとか。

仕方がないのでランプを火を点けて本を取って読む気もないのにばらばらとページをめくる。

(明日は村長さん家で勉強か…)
ため息が出た。

次の日。村長さんの家に向かった。

「おはようございます」

「おはよう」

村長さんはふさふさしたひげとぴかぴかした頭が特徴のおじいさんだ。父さんが子供のころからこの顔だったらしいけど、何歳なんだろう。

「おはよー」

メロンもいる。僕とメロンは村長さんの家で週4日ほど勉強している。

「さて、どのへんからだったかな…」

のんびりと本をめくり、読み上げ始める村長さん。この声が眠気を誘ういい音程なんだ。

「起きろ」

小声を出して肩をつついてくるメロン。

「まだ寝てない」

言い返す。

「今日はここで終わりにしよう」

村長さんは本をパタンと閉じた。

「え。今日は早いですね」

まだ午前中だ。

「…この家に伝わっている本を調べてみるとな、村の北に何やら遺跡があることが分かったんだ。2人で行って調べてみてくれないかな」

「はい！」

ちょっと日常とは違うことが起こった。それだけで気分が舞い上がる。

「はあ…」

メロンは面倒くさそう。

村長さんの家を出た。

「じゃ、私は帰るからレオよろしくー」

「なんで？」

「寒いし。…うーの好きでしょ？」

「一緒に行こうよ…2人で行けって言うてたし」

「めんどーくせー」

一旦解散して、昼ごはんを食べたあと、村のすぐ外で待ち合わせした。

「さ、とっとうと行こう行こう。何も無いの確認するだけだろうし」

やる気無い声を出すメロン。

「行くっ行くっ」

僕は楽しみだ。

村長さんの手書きの地図を見ながら歩いていく。見づらい。

「…」

「…」

「どうしたの？…上下逆だったの？裏は何も書いてないよ？村の場所も分かんなくなってる？ねえ、ねえ？」

「メロン、うるさい」

「はいはいー黙ってますよー。レオくんのだいぼっけんだもんねー」

「…」

「…」

「こっちでいいのかな…」

結局メロンに地図を渡した。

「ん？んー…ん？んー…。…きつと、いいんじゃない？うん」

分からなかったみたい。でも、地図は手放さない。

「あれ、隣村だね。地図に書いてある？」

「ん？んー…」

やっぱり分からないみたい。さらに、上り道になった。人がめっただに通らないところだから雪が多くて歩きにくい。

「ん？あれなんだろ」

メロンが立ち止まった。見ている先を見ると、上り坂の先に長く分厚い板のような岩が倒れていた。近づいてみる。

「これ動かせば入り口なのかな」

「無理だ。帰ろ」

くるつと振り向くメロン。でも、そのまま止まって、足で地面を叩き始めた。

「…何やってんの？」

いらいらしているのだろうか。

「氷の下に何か見えるからさ…」

そばによつて見てみる。ひび割れた氷の下に何か黒いものが見える。

「えい！」

僕も踏んでみる。

がつつ、ばらばらばら…

ひび割れていた氷はあっさり壊れた。

「レオ！先に進めるよー！！」

「ほんとだ…」

割れた場所を覗くと、下には広い空間があった。

「よつこらせつ」

メロンがお年寄りみたいな声を出して飛び降り、僕も続く。

(いつの間にか先頭切つて進んでる…)

「寒いー…」

ぶるぶるつと体を震わせるメロン。ところどころ黒い板が見えるほかは氷で覆われていて、保存庫に入れられた魚になったみたいなき分だ。

「わ…ドア？」

「…メロン？」

メロンの視線の先には、氷の壁と天井と床の中で黒いドアが埋まっていた。

「誰かの家つてことはないよね？」

急に不安がるメロン。

「家つてことは…ないと思うよ？誰も出迎えてこなかったし…」

「…」

「…」

「開けてみなよ…」

「メロンがどうぞ…」

ふーっと息を吐いてメロンはドアノブをひねる。

「開いたよ…行こう」

「うん…」

「…怖くなつた？」

こつちに振り向いてきた。

「うん…怖い。でも、わくわくもする…」

「私も。久しぶりに楽しい」

メロンは口元を笑わせて目は輝いて、手は少し震えていた。僕も同じなんだろう。僕達はドアの先に進んだ。床には石が敷き詰められていて、壁と天井は草木などの彫刻が施された石でドーム型になっていた。

「…像？レオ…あれ…」

前方には小さな像。女神像なのか？が立っていた。

「凄い…こんなところに聖堂みたいなものがあつたんだ…」

天井が高い。

「どこの女神様だろう…これ。幼い感じだけど…。ん…ひび入ってるね」

像に興味津々のメロン。

メリメリメリ…

「何の音かな？」

メロンも首を振った。分からないらしい。

「気のせいかな…ひびが大きくなってるような気がするんだけど…。ちよつと見て…」

像の頭にできたひびを指をさして説明しようとする。

パン…！！

「きゃ」

「うわあ…！！」

乾いた音がして、突然あたりを強い光が包んだ。

「…ふう…おさまった…レオ？」

「…大丈夫」

頭を振ってみる。

「ん？誰？あれ…」

前に誰かいる。

「レオ？」

僕の向いた場所を見てみるメロン。その先の、像があつた場所には女の子が座つていた。赤色の長い髪と大きな目、人形が着るようなきらきらした服。

「か…かわいい」

メロンは子猫を見ているような顔だつた。

「だね…。って像の中にいたの？あの光は？」

「…ん？うーん…」

メロンも考え込んで固まる。

「…」

「…」

しばらく2人で顔を見合わせて黙っていた。

「だ…れ…？」

か細い声が聞こえてはつとなつた。

「！ええ…っと、私はメロン」

「ぼ、僕はレオ…き、君は？」

「…ミイナ…」

「どうして、ここに？」

「…分かんない…」

涙目で小刻みに震えていた。弱々しさがまた、こつこつするのは不謹慎かもしれないが、かわいらしい。

「あの」

さらに話そうとした僕をメロンが目で止めた。詳しく聞くのは無理ということだろう。

「どこか、行く場所はあるの？」

「…ない…」

「私達と一緒に村に行こうか？」

ミイナはしばらく黙ってから、

「……………うん」

目を僕達に目を合わさずに答えた。

メロンがミイナの手を引いて村に戻った。

「手を引いてるわけじゃないんだけど…」

ちよつと照れてるメロン。

「なつかれてるのかな」

ミイナはずつとメロンの腕をつかんでいる。不安なのだろうか。

「疲れた…」

結構歩いた。

「すっかり日も暮れちゃったねー」

ようやく村の入り口にたどりついたら、網に入った魚を運んでい
る父さんがいた。

「ん？お前らどこ行ってたん…」

どうやって説明すればいいんだろう。

「どうした？その子、お前らの子か？」

笑いながら冗談を言う。

「村の外でうるうるしてたんですよ。迷子になってるのかも…」

メロンが説明してくれた。

「隣村の子にいたかな…うーん」

父さんは腕組みして悩んでいる。でも僕達は知ってる。思い出そう
としてもいるはずがない。

「どこから来たの？」

父さんが直接ミイナに聞いた。

「洞窟から…」

「洞窟？どこのかな？」

「…」

メロンの手をぎゅつとにぎる。

「…じゃあ、お父さんお母さんの名前は？」

「…」

泣きそうな顔。

「…うん。やっぱりお前らの顔を上げて僕達を交互に見る。」

「それは違う」

軽く流すメロン。

「とりあえず、明日隣の村に連れて行ようかな…」
「とりあえず、その場を取り繕っておこう。」

「今日のところは私の家にも…それでいい？」

「うん」

ミイナはちょっと嬉しそうにメロンを見上げて返事した。

ペンダント

次の日、父さんには隣村に行くと言って村を出た。

「さて…どうする？また洞窟行ってみる？何か見つけられるかもしれないし…」

隣村に行っても意味が無いことは分かっている。

「ん…そうだね。それでいい？」

今日もミイナはメロンの手をつかんでいる。

「うん」

雪道を歩きだす。

「確かこつちだったよな…」

「多分…迷ってたし…」

しばらく昨日の分かりにくい地図を眺めながらうつろう。

「あれ、きれい…」

ミイナが指差している方向を見てみる。太陽の光にツララが当たってきれいに輝いている。

「ん？ちよつと？」

ミイナがメロンの手を引っ張ってぱたぱたと走り出す。

「こつち、こつち！」

「あ、危ないって！走ったら」

「わっ！」

どてつ。ミイナが転んで、ついでにメロンも転んだ。

「ごめん。…お姉ちゃん」

ミイナが泣きそうな顔で謝る。

「？お姉ちゃん？ま、まあいいよ。ゆっくり歩い？」

少し照れてるらしい。

ぴきっ…

？

2人が立ち上がろうとする。そのとき、何の音か予想がついた。

「待つ」

動かないで、そーっと移動して…と言おうと思った。
バキバキバキ、ガラガラガラ…!!

「きゃわああああああ!!」

「わああああああ!!」

「メロン!!ミイナ!!」

崩れて開いた穴に走る。…走ったら危ないんだった。

「うわ!!わわわ…わわわ!!」

僕も滑った。

ドガッ

「ふぎゃ!!」

穴は思ったより浅かった。後から落ちてきて、蹴っ飛ばしてしま
ったメロンが猫のような声を上げる。僕はしりもちをついて着地。

「いっつ!!いっつ!!いっつ!!いっつ!!いっつ!!何だこの野郎!!」

立ち上がって怒鳴ってきたメロン。怖い。ミイナがびくっとして
僕のそばによってきた。

「ご、ごめん…。ミイナは大丈夫?」

「うん。平気」

怖がったミイナを気遣うメロンと、機嫌を治したミイナ。

「あ…お、思ったより浅くてよかったね…」

メロンの顔をうかがってみる。

「ふう…。まあ、ね。蹴りのほうが痛かったけど」

「ごめんごめん…。…これも、昨日の洞窟みたいな感じだね…」

黒い柱があちこちに立っていて、黒いタイルがところどころに見
える。

「…実は意外とたくさんあったのかもね…」

キョロキョロと周りを眺めるメロン。

「探索してみよう」

3人でうろうろしてみる。

「…これも聖堂みたいなものかな…」

「昔の人って教会とか神殿とか、そんなのばかり造ってたらしいからね。あつドアもあつた」

メロンが柱の間を指差した。

（また像があつてミイナが増えたりして…）

「…」

「…」

ドアの前で立ちすくむ。

「どうぞ?」

「今日はレオでしょ?」

深呼吸してからドアを開けた。広い部屋。壁と天井は彫刻が彫つてあつてドーム状。

「昨日と同じ…でも像は無いみたいだ」

「彫刻掘つてる間に一つ聖堂造れば十分だつて気づいたんじゃない?」

（ふてくされたメロンに戻ってる…）

「あれ、なんだろう…」

昨日像があつた場所に今度は彫刻が掘つてある長い箱のようなものが置いてあつた。

「そりゃ…見た目どおり…棺でしょ?」

「…」

「…」

立ちすくむ。

「…どうぞ?ここは男らしくさ」

やっぱりメロンは僕に任せるらしい。

「…僕はらしくなくていいからさ…ここは漢らしく…」

「あ?」

凄い目で睨んでくるメロン。

「わ、分かったよ。開けるよ…。ミイナを」

ミイラでも入ってたら、ミイナがかわいそうだ。

「うん」

メロンはミイナと一緒に離れた。

「よいしょ…」

「お…お…お…」

棺を横にずらすようにしてみた。なかなか動いてくれない。

「ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ…。ふう…ふうふう。重いなこの蓋。釘が打つてあるのかな」

周囲を確認するが、よく分からない。やっぱり力が足りないのか。

「ぬぬぬぬぬ…。ふう…。重い…。あの…」

「…分かった分かった！手伝えばいいんでしょ！？」

メロンがつかつか歩いてきた。やっぱり頼りになる。

「よいしょ！はいさ！」

「メロン、力が抜けるよその掛け声」

「うるさ」

「ずずず…」

「あと少しだ！」

どきどきしてきた。

「ずずず…ドオン！」

半分まで押した蓋が傾いて地面に倒れこんだ。

「うわああああ！」

「きゃああああ！何何々！？何が入ってたの！？」

取り乱すメロン。叫んだのは僕が先だけ。

「いや…その…見てない。なんとなく叫んじゃった…」

「レオ…私の寿命を縮める気？」

2人で恐る恐る近づいて、そーっと覗き込む。

「武器…。宝箱だったんだ…」

錆びてないぴかぴかの、大剣、斧、槍、弓、杖などたくさん入っていた。

「ほふうー！ー！。全く、ほんと何びびってたんだか。ドア一つ開けるにもおどおどして、蓋を開ける力も無いなんてほんと貧弱だし、何も見ないでうわーとか叫んでほんとびびりだし、ほんとに一緒に

いるとほんと疲れる」

緊張感から解放されて饒舌なメロンを横目に、大剣を両手でつかんでゆつくり持ち上げてみる。

「よつと…。おう？つとつとととと」

つかんだ瞬間に大剣を振り上げてしまい、勢いで後ろに下がる。

「思ってたより、軽かったんだ？」

にやにやしながら見てくるメロン。

「うん…軽い。本物じゃないかもね、これ」

「よつこら、おつと。ほんとだ軽い。何でできてるんだろ？」

メロンは自分の身長くらいある斧を取り出した。

「ツララで試してみよう。やあっ！！」

大剣でつららを斬ってみた。

すぱっ、ことん

切り口の面はきれいに平らになった。

「私も…せい！せい！ほいさ！」

メロンは斧を横に右に左に振った。

ことんことん

斬ったツララは割れることなくばらばらに。やっぱり切り口は平ら。

「凄いこれ…」

うつとりしながら、斧を眺めているメロン。ちよつと怖い。

「…もう、そつちいっていい？」

ミイナだった。すっかり忘れていた。

「あ、大丈夫だよ。腐った死体じゃなかったから」

「え…」

大丈夫という言葉聞いてから、腐った死体とか言われて、こつちに来ようとしたミイナが立ち止まる。

「メロン…」

肘でメロンを突っついて警告する。

「しまった…。大丈夫、おいで」

メロンはミイナのほうに向かって歩いて、ミイナもやってきた。

「……」

ミイナがじーっとメロンの斧を見ている。

「ミイナもほしい」

「はい？これ？」

「うん」

困るメロン。こんな切れ味の武器は危ない。あ。

「杖なら大丈夫じゃない？」

「あ、そうか」

がさごそと杖を探すメロン。

「……どう？」

ミイナに杖を持たせてみた。杖が長すぎる。それに、ひどく不満そうだ。

「刃物はやめときなって」

メロンが諭す。

「……ん」

不満そうなミイナ。

「メロン。これは？」

宝箱の中にはペンダントも入っていた。

「どっ？」

メロンがミイナの首にかけてみる。ペンダントもけっこう大きいけど似合ってるかも。

「うん！これがいい」

とてもうれしそう。

「さて……他に見るものもないみたいだし……帰ろっか？」

「そうだね」

メロンに同意して帰ることにする。来た道を戻って最初に滑り落ちた場所へ。

「浅いし……登れるね」

僕が最初に登って、ミイナをメロンが押し上げて、最後にメロン

が登って終わり。

「…」

帰り道、ミイナはペンダントを光に当てて反射を楽しんだり、顔に近づけてじつとみたり、遠ざけて眺めたり、ペンダントから手を離してポーズをとってみたり。お気に入りらしい。

僕も自分の剣を眺めてみる。僕の顔が薄く写っていて、薄く向こう側の景色も見える。透きとおっていてきれいだ。

「あ、隣村見えるね…一応寄ってく？」

「無駄でしょ。やめとこ」

メロンに却下されたので、そのまま進む。

「やれやれ…2日続けて大冒険だった。戦利品もあるけど」
メロンはそう言いながら斧を眺めて満足げ。

「いくらで売れるかな、これ」

そして、こつちを見てくる。

「…売るの？」

「持ってもしょうがないでしょ？本の中の怪物と戦えるわけじゃないし」

「まあ、それはそうだけど…」

僕は取っておこう。

「ふう…ようやくついた」

ほっとする。村に着いた。

「よう…。な、何持ってんだよ…」

また父さんだ。物騒な物を持つてる僕達に驚いている。

「村に行く途中の洞窟で見つけました」

『どつだ』といわんばかりのメロン。

「洞窟？そんなものがあつたのか？」

驚く父さん。

「はい…足をすべらせて…云々」

メロンがいろいろ説明。

「はあ…。で？肝心のミイナちゃんの親御さんには会えた？」

「いいえ…。まあ、当分私の家に居させてもらえそうだし」
村に行つてない。行つてもいないことは分かっている。

「そうか…。ま、そのうち話してくれるだろうしな。あ、明日は村長のところ行くんだぞ？」

「はいはい」

父さんは魚を持って去っていった。

「まあ明日から勉強か、面倒だ」

さっそく愚痴を言うメロン。

「日も暮れてきたし、帰ろうか」

僕も日常に戻るのが寂しい。

「そうだね、結構楽しかったよレオ。じゃ。行く、ミイナ」

「うん」

「さよなら、メロン、ミイナ」
解散した。

誰もいない村

夜。自分の部屋のベットで横になって剣を眺める。

(…また、明日から元に戻っちゃうのかな…)

ドンドンドン

1階でドアを叩く音が聞こえた。こんな時間に誰か来たらしい。

「レオー。ちょっと降りて来い」

(…父さんの声、なんだろう?)

階段を下りる。

「レオ、今から村長の家に行くんだ」

「え?」

「いいから、早く」

「は、はあ…。じゃ行つてきまーす…」

父さんの雰囲気、何も言えないまま、村長さんの家へ。

「レオも呼ばれたんだ?」

村長さんの家にメロンもいた。

「うん…。あの、何かあつたんですか?」

「お前達、隣村に行つたんだよな?」

「は、はい」

「何があつたか知ってるか?」

僕とメロンは顔を見合わせた。

「実は…隣村には行つてなくて…」

メロンが説明してくれた。

「…お前達…何か隠してないか?」

村長さんは嘘をついたときは鋭い。

(う…)

「信じてくれないかと思つたんで言わなかつたんですが…その」

メロンが洞窟で石像を見つけ、それが割れてミイナが出てきたことを説明した。

「…」
「…」

黙る村長さん。

（当たり前だよな…信じられるような話じゃない。……隣村の話が聞きたいんだけど）

「隣村で何かあったんですか？」

聞いてみた。

「あ、ああ…。それが、急に誰もいなくなっただ。なだれに巻き込まれたとかじゃあない。建物は無傷だし荒らされたようでもないで、人だけがいなくなった」

「…引越し？」

「…」

「…」

メロンの一言は暗い雰囲気と和ませようとしたのか？本当にそう思ったのか。

「…そのミイナちゃんは、スーケットさんの家にももらえるかな」

村長さんが口を開いた。ちなみにスーケットはメロンの苗字。

「大丈夫です」

うれしそうに即答するメロン。

「よかった。何か困ったことがあったらいつでも言ってくれ。さて…夜遅くに呼び出して悪かった…。…気をつけてお帰り…。隣村には行かないようにな…。最近2人とも活発だから…。それと、明日は来るんじゃないぞ」

頭をかいて何か悩んでいるらしい村長さん。

「…はい」

隣村行ってみたかったのに。

「はい。おやすみなさい」

立ち上がろうとする。

「レオは…ちょっと残ってくれ」

「は、はい」

座りなおす。

宿題でも忘れてたかな。

「じゃ、おやすみ、レオ」

メロンもそう思ってるみたいで、にやにやしていた。

村長さんと僕だけになった。

「人を信じるということはどういうことだと思っ？」

唐突な質問。

「え……」

「わしは、その人を信じると決めたら考えることを止める、それが信じるということだと思っっている。疑いだせばきりが無い。ときには雑音に耳を塞ぐことだっって大事だ。それで失敗しても後悔も反省もしない決意。そういう愚かさ……それが信じることだろう」

「は、はあ……」

（何言ってるんだろう。まあ、持論をぶつぶつ言っことは結構あるけど）

「……深い意味は無い。ちょっと思っただけだよ……。気をつけて帰るんだぞ……」

「はあ、おやすみなさい……」

家に帰ってベットに横になる。

（隣村に行ってみたいな……。人が全然いない村ってどうっ感じなんだろう……）

ジリリリリばしん

（あと5分……）

時計を手にとって見る。

（！げ……。とっくに村長さんの家に行く時間なんて過ぎてる……。おこしに來ないってことは父さんも寝坊か……？）

階段を下りて1階に。

「父さんー。おーい。また怒られるよー」

人のことは言えない。

(もう出たのか？最近洞窟探検してて疲れてたから、起こされたけど起きれなかったんだな)

ハムを切って、パンを焼いて、コーヒー入れ、ゆっくりと遅めの朝食を楽しむ。

(どうせこれだけ遅刻してるんだから、もうどうでもいいや…)

「さて、行ってきまーす…」

僕以外誰もいないけど、挨拶だけする。やっぱり不安になりながら外に出る。

(…?)

不気味なほど静まり返っている。人がいないだけじゃない。人の気配さえしない。遅く家を出たからだろうか。自分の足が雪を踏みしめる音が聞こえる。

(足音って大きいんだな…)

村長さんの家に着く。

「おはようございます…」

やっぱり誰も居ない。

「レオー…遅いよー」

メロンがいた。ほっとした。

「寝坊して、起きたら父さんがいなくてさ…。外に出ても誰も居ないし、みんなどこ行ったの？」

「ミイナがいることと、早起きしたこと以外は同じ…。どうしたんだろう…」

メロンが視線を移す。ミイナが寝転がって村長さんの家にある本を読んでいた。

「…隣村と同じことになったのかな…」

昨日の話を思い出した。

「かも…外に出てみようか…？」

元気ないメロン。

「…だね」

外に出てもさっきと同じ。雪を踏む音が3人分になっただけ。

「…」

「…」

「…」

「誰かいませんか？」

「ミイナがいきなり叫んでちょっとびっくりした。」

「1件1件回ってみよう」

「…うん」

「うなづくメロン。2手に別れて家を回ってみる。」

「どんどん」

「ごめんくださいーい」

「片っ端からドアを叩いたり、呼び鈴を鳴らす。」

「がちゃ」

「お、おじゃましますー」

「鍵のかかってない家には勝手に入ってみる。」

「2時間くらいたっただろうか。メロン、ミイナと合流した。」

「誰かいた？」

「誰も…どこ行ったんだろう…。パパも、ママも…」

「お姉ちゃん…」

「泣きそうなメロンと気遣うミイナ。」

「……………メ」

「だああああああ…！！誰か出て来ー！！い！！！！いないの
ー！！？盗むぞ！！金取るぞ！！引き出し全部開けるぞ！！日記
も全部読むぞ！！出さなかった恥ずかしい手紙も読み上げるぞー
ー！！！！！！」

「ひえっ」

「声をかけようとしたら、メロンが大声で叫びだし、ミイナがびっ
くりしてた。」

「ぶっ」

「叫んで元気を出したみたいだ。」

「…なんか…臭い？」

くくん臭いをかぐミイナ。

「ほんとだ…何か焦げてるような」

確かに臭い。

「あれ…」

メロンが見ている方向をしてみる。まだ細く薄い煙が窓から立ち上っていた。

「火事だ！」

「うん、火事だ」

「燃えてるー」

動転してぼんやりしているメロンとどこか楽しそうなミイナ。

「…」

「…」

「…」

「急ごう！！消さないと！」

たっぷり一呼吸おいてから走り出す。2人も我に返ったのかわつてきた。煙の出ている家に、ドアを蹴破ってはいる。

「こっちか！」

台所。火にかけられた鍋とその周りが燃えていた。適当にソファにかけてあつた服を取ってばさばさと火にかぶせたりしてみる。

「ふう…あっさり消えた」

冷や汗をぬぐう。

「…火を消す暇もなかったってこと？」

真っ黒い鍋を見つめているメロンが呟いた。

「…そういうことだね…。とりあえず…他の家も見してみよう」

また手分けして他の家にも入ってみる。火事にはなっていないが、何件か火をつけばななしかった。小さな村でも全部入るとなると結構時間がかかった。家を回った後は、一旦メロンの家に全員集合した。

「ふうー…」

「とりあえず…何か食べようか？」

メロンが立ち上がる。

「できるの？」

「まあ、まかせといて…」

ぬいぐるみで遊んでいるミイナを見ながら待った。

「…おまたせ」

自信なさげの顔が気になる。

「……うん…」

「……」

黙って食べる僕とミイナ。

「悪かったな」

何の反応もなく腹が立ったらしい。心の中でメロンに謝ってお
う。

「さて…これからどうしようか？」

話題を食事からそらそう。

「隣村に行ってみない？私達がここにいるみたいに、誰か残って
かも」

もそもそと進まない食事を続けているメロン。

「そうだね…行ってみようか。ちょっと待ってて」

「どした？」

「昨日の剣持ってくる。何かあるか分からないし」

少し僕はうきうきしている。

「…私も斧持ってくるかな」

メロンはちょっと真剣だ。

自分の家から戻ってくると家のドアの前で2人が待っていた。

「さあ、行こう」

道に沿って進むだけで何も起こらず、到着。また、2手に別れて
1件1件家を回る。

どんどん

「おじやましますよ」

がきっ

「ドアも壊しますよー」

すぱっ

剣でドアを斬って入る。誰もいないのを確認すると次の家で同じことの繰り返し。だんだん面倒になって最初から無言で剣で斬って入る。

すぱっ

誰もいないのを確認。戻るか。

「誰だ!!」

声のする方を向く。

「うわあ!!」

足を蹴飛ばされて転ぶ。

(剣を)

がんっ

剣を蹴っ飛ばされた。

「ぐっ」

上に乗っかられて、目の前に短刀がきた。

「村の人達はどこにいる？」

「し、知りません…。ぼ、ぼぼ、僕も、隣から来て、隣の村から来て、僕の村が誰もいなくなって、あの、僕はいるんです、それで隣の村のこの村、誰もいなくて…」

「……」

すっとな立ち上がった。

「あ、あの…」

疑いは晴れたんだろうか。

「誰もいなくなっていて…取り乱していた。悪かったな」

今まで慌てていて分からなかったけど、きれいな女の人だった。

(薄紫…変な色の髪だ。でも、きれい。長いツインテールが似合ってる)

「…？どうした？」

「い、いえ…」

焦った。

「誰かいるよ？」

ミイナの声がして、2人が部屋に入ってきた。

「仲間か？」

「仲間だ！」

僕が聞かれて、答えたのはメロン。

「…ずいぶん物騒なものを…持って歩けるのか？」

じつとメロンの斧を見る女の人。

(身長くらいの斧だもんな)

「こっに見えて、怪力で有名で」

意味の無い嘘をつこうとするメロンから、女の人が斧を取り上げた。

「！」

軽くてびっくりしたみたいだ。

「なんだおもちゃか」

「違うよ」

斧を返されたメロンがそれで花瓶を斬った。

すぱっ、と、ざばー

花瓶が割れずにきれいに斬れて水が流れ出した。

「…何でできてるんだ？」

女の方は花瓶を見つめたままつぶやいた。

「さあ…洞窟にあつたから、分からない」

ちよつと得意顔のメロン。

「古代技術の武器か。単純な刃物は珍しいな。…その洞窟は近いのか？」

女の方は興味を持ったらしい。

「ここから歩いて…1時間くらい？」

メロンが答えた。

「昔はここに住んでいたのに…知らなかった」

女の人がつぶやいた。声もきれいだ。

全員一旦静かになる。

「私はヴィヴァ・フリデリーバ、あなたたちの名前は？」

「私はメロン、こっちがレオ、この子はミイナ。よろしく、パープルさん」

「パープルさん？」

「言いくいから、いいでしょ？」

「ま、まあ、いいか」

メロンに押し切られたみたい。

「…それはいいとして…。村に誰もいなくなって…連絡船が来るのを待つしかないか」

話題を切り替えるヴィ…パープルさん。

「来月まで待てば来るしね。パープルさんもそれまで私達と一緒にいる？」

メロンの中ではすっかりパープルさんになった。

連絡船

それから連絡船が来るまでの約1ヶ月半。パープルさんの家のドアは僕が壊してしまったのでメロンの家で4人で過ごすことになった。

数日後。

スパツ、ばらばら

「剣のほうも凄いい切れ味だな。蹴飛ばしたとき、足を斬らなくてよかった」

パープルさんが剣を持つと様になるなあ。

「剣習ったりしてたんですか？」

聞いてみる。

「いや、独学」

剣を眺めながらあっさり答えた。

「剣、教えてくれませんか？」

「ま、まあほぼ素人の私でよければ」

「メロンも習えば？」

「私斧だし」

そっけないメロン。

「大事かもしれないよ？何かあるか分かんないしさ」

何だかやる気なさそうに見えるメロンをもう一度誘う。

「……」

しぶしぶ加わった。3人で長めの木の枝を使って練習した。

「えい！やあ！ほい！！」

メロンが枝を振り回す。

こつ、どてつ

足をパープルさんに蹴飛ばされて転んだ。

「そんなに振り回さないで、相手の動きをよく見なよ」

「はいよ」

一瞬むすつとしてパープルさんを見たけど、頷いた。

この間に来た洞窟に来ている。

「こんなところに、洞窟：というか神殿みたいなものがあつたんだな」

武器のあつた洞窟の中で、彫刻や柱を見ながらパープルさんは驚いていた。

「あの宝箱です」

いろいろ手にとつてみて、

「これにするか」

短刀を2本手にした。

「ん：全部持つていけばいいか？」

パープルさんは宝箱の中の武器を眺めた。

「：止めときましよう神殿だし：」

祟りがあつたら怖いから止めておく。

「まあそれもそうか：ここにあつた方が取られなくて安全かもな」

そのかわり僕やメロンの武器の予備として短刀2本とあとナイフを何本か持つて行くことにした。

「ただいまー」

「ただいま」

メロンの家にいたメロンとミイナにあいさつ。

「いい武器ありました？」

メロンがパープルさんに聞いた。

「これ、短刀だな。あとはナイフを何本か」

「あと、僕とメロンの予備に短刀持つてきた」

短刀をメロンに渡す。

「ほう：こっこのほうが使いやすいかな」

短刀を眺めるメロン。さて：とパープルさんが立ち上がる。

「どこ行くんですか？」

「ちよつと試し斬りに」

「僕も…」

ぎゅ

ミイナに手をつかまれた。目をつぶってふるふる首を振っている。

「ん？どうしたの？」

聞いてみても黙ったまま。

「ははっ。試し斬りは一人でいい」

パールさんは笑いながら出て行った。

？

ミイナはさつと手を離してもとの位置に戻ってさつきまで持っていた本を読み始めた。そういえば少し疲れた。テーブルについて一息つく。

「…連絡船が来てさ…村のこと話して…あとどうなるんだろう？」

メロンに話しかけてみる。

「国の人達が誰かが村の人探してくれるんじゃない？街でのんびりするか、村で待つか…。大勢なんだし…誰か一人見つかれば全員見つからんじゃない？」

そっけないような感じのメロン。

「うん…。どうしていなくなっちゃったんだろう…」

(逆にどうして僕達だけ残ってるんだろう)

「さあ…急に寂しくなった？」

「うん…」

父さんにも、村のみんなにも会いたくなってきた。

(最初は、何だか楽しいことが始まったように思ってたんだけど…)

「私も…寂しいよ…」

急に暗い顔になったメロン。

「…」

「…」

「ああ、やめようやめよう。うまくいくと思おうよ？」

メロンが首を軽く振った。

「うん。そうだよね」

「これ、何て読むの？」

ミイナが本を持ってやってきた。

「ん？それは……………」

「読めないんだね？」

にやにやしながらこつちを見てくるメロン。僕に代わってミイナに教える。くやしい。

がちゃ

ドアが開いて、パープルさんが帰って来た。

「沖に船が見えるぞ!？」

「え……………」

(まだ来るはずない。村の状態が分かったのか?)

全員外に出て、沖を見る。ぽつんと船が見えた。

「船だー」

指をさすミイナ。うれしそう。

「連絡船だ……………」

足りない食料を運んできたりする船。何回も見たので見間違いではないはず。

「うん。連絡船だ……………」

メロンは少し不安そうだった。

「……………」

「……………」

連絡船を沖で見つけてから3時間後、日も暮れ始めている。僕、メロン、パープルさんはずっと見ている。ミイナは飽きて歩き回ったり、ペンダントを眺めたりしている。

「一向に近づいてこないね……………」

たぶん全員思っていることをメロンが言った。

「まあ、こんなことをいうのは……………なんだけど。あれ……………人が乗ってる……………」

のか？」

たぶん全員思っていて口にしなかったことをパープルさんが言った。

「ボートで行ってみよう……」

「父さんのボートがあるよ……」

パープルさんの言葉を受けて、ボートを取りに行く。

ボートの準備ができて、全員乗り込んだ。
ばりばり

誰も何もしゃべらず、船のスクリーンが水をかく音だけが聞こえ、日が暮れ始めていて寒い。ようやく船に近づくと船体が壁のようにそびえていた。船にくっついてるうきわにつかまって、階段を使って上に移動した。

「……やっぱり人の気配がしない……」
がっかりした。

「探してみよ？みんな寝てるのかもしれないしさ……」

メロンが僕の肩を叩いてくれた。

全員諦めているが、手当たり次第にドアを開けて調べてみた。結果、誰もいなかった。

「まあ……悪い予感はしていたが……」

パープルさんは肩を落とした。

「ど……ど、どうする？」

みんなに聞いてみる。

「もうだめだあああああ！！もう世界中誰もいないんだ……」
！……！

こうやって発散するのがメロンだ。

「ママあ……パパあ……」

ぼろぼろと涙をこぼし始めた。発散するためではなくて本当に限界だったらしい。

「父さん……」

僕も悲しくなってきた。

「う、う、う、ぶわあーん！！」

突然ミイナが大声で泣き出した。

（そうだった。ミイナは村の人達が居なくなる前から一人ぼっちだか・・・）

メロンもミイナを見て何とか泣き止んだ。同じことを考えたんだろう。パールさんは暗い顔だけど口だけ笑顔を作りながらミイナの頭をなでている。

「この船：動かせない？」

メロンがぼそつと呟いた。

「…操縦できる？」

聞いてみる。

「できるわけないでしょ？」

けるっと言うメロン。

「でも、あつちに操舵室？みたいなものがあった…」

そう続けた。全員で、甲板の上にある部屋に行ってみる。

「…さっぱり分からないね…」

レバーだらけで何をどう動かせばいいか分からない。

「全部オンでいいんじゃない？」

がしゃがしゃレバーを動かすメロン。

（大丈夫かな…）

がががががががが…

船体が揺れだした。

「だ、大丈夫なの？これ！？」

「知るかあ！！」

メロンに怒鳴り返された。

「ハンドルを…！！」

パールさんがハンドルをつかんで、

「ど、ど、どつちに切ればいいんだ？」

慌ててる。

「地図！！」

テーブルに地図が広げてあったけど、がたがた揺れてて読みにくい。地図を読む道具らしきものが箱の中にたくさん入っていたが、何をどう使えばよいか分からない。

「……どつちだ！？」

パールさんも焦って聞いてくる。

「…分からないよー！！」

この紙が地図ということ以外、今居る場所も何も分からない。

「メ、メロン！とりあえず、速度を落としてくれ！！」

「どれが速度か分かんないってばー！！」

パールさんに叫ばれ、大量のレバーやら目盛りやらを前にして、半泣き状態のメロン。

「うわっ！！前に氷だ！！曲がるぞ！！！！」

パールさんが叫んで、ハンドルを目いっぱい回転させる。

がががががが

思いつきり船が曲がり、机の上にある地図やら何やらが床にどこどこ落ち、体がどこから引っ張られる感覚。

「ふう！！！！」

パールさんが一気に大きく息を吐いた。

「がちゃん！！ガクン！！」

「ひっ！！！！！！」

急に速度が落ちた。

「速度変えた…」

メロンがその場にふらふら座り込んだ。

「…もう大丈夫だよ…」

大き目の柱にずっとしがみついているミイナに声をかけた。

街の人を追って

その日は船内で眠り、次の日、地図が分からないので目で大陸を確認しながら進むことにする。半日後。

「港だ…。人が見えるか？」

パープルさんに言われて、置いてあった双眼鏡で港を見てみる。

「うーん…。いる！！誰かいるよ！！！」

感激して声が裏返ってしまった。

「ほんと？見せて！！！」

メロンに双眼鏡を取られた。

「本ただー！！船もいっぱい来てるし！」

みんなほっとして笑顔になった。港に手を振って誘導する人の指示に従って進む。

「よしっと」

メロンがレバーを引いて船を止め、全員降りた。

「人がいる…」

当然のことに感動する。僕、メロン、ミイナがぼーっと港にいる人達を眺めている間、パープルさんはあたふたと集まってきた港の人達に事情を説明し、しばらくしてこっちにやって来た。

「とりあえず、領主のところに行って事情を説明することになった。村と連絡が取れなくておかしいとは思ってくれてたようだし…」

パープルさんが事情を説明しに行っている間、宿で待機することになった。

「ふかふか…」

ベットに横になる。費用は領主が持ってくれるそう、高い宿にしたからいいベッドだ。メロンやミイナは隣の部屋でゆっくり寝てるんだらう。

「…」

何で村の人達はいなくなっただろう？俺達がミイナを石像から出して、武器を宝箱から出して…そのせいだろうか？

(…考えるの止めて…寝よう)

ドンドン

「レオー。パープルさん帰って来たよー」

メロン達の部屋に全員集合しパープルさんの話を聞く。調査団を出してもらえるらしい。他にもその間に住むかという話やらお金の話やらいろいろ聞いた。とりあえず心配しなくていいらしい。

「というわけで…今日は疲れた。何か食べてから眠ろう」

パープルさんは食事中も眠そうだった。疲れてるんだろう。

夜中。

こつこつ…

ドアを静かに叩く音で目が覚めた。

「レオー…レオー…」

メロンの声？

「どうしたの…？」

ドアを開けて、メロンを部屋に入れる。

「ひ、人が…窓の外見てみて…」

「ん？」

言つとおり窓の外を見た。

「なんだあれ？」

街の人々がふらふらと家から出てきて道路を歩いていく。次々と人が合流して、川のように進んでいく。子供から老人まで、女性も男性も。ガス灯の明かりに照らされて幻想的といえなくもないが、不気味さのほうに勝っている。

「追いかけてみよう…！」

「パープルさんは…？」

メロン達の部屋の前を通ったときにメロンに聞かれた。

「…疲れてるみたいだし…。手紙置いとこうか。それで僕達だけ

で危なそうだったら帰ろう…」

「うん…」

ドアの隙間に手紙を入れておいて、宿から外に出る。

「あのー…すいませーん…」

ふらふら歩く人に恐る恐る話しかけてみるが、こつちを見たのか見ないのか分からないくらいにふつと見ただけで視線を前に戻してしまった。

「無視された…」

「追ってみよ？」

メロンに言われて、人の流れの中に入ってみる。後ろからどんどん人がくつついてきて、あつというまに最後尾が見えなくなった。

「これって、この街の人全員入ってるのかな」

小声でつぶやいてみる。

「…そうみたい」

格好がベツトから出てきたような人が多いのでよく分からないが位の高そうな人も農民の人もいて、中には鎧を着た警備をしていた兵士まで混ざっているようだ。誰一人口を開かないので気持ち悪い。

「…」

「…」

「…疲れた…」

メロンがつぶやいた。徐々に日が登ってきて朝になりつつある。

歩くペースは遅いけど、雪道を長い時間歩き続けてだんだんきつくなってきた。もう集団は街も街道もを離れて進んでいる。

「眠い…どこまで歩くんだろう？子供も歩いているのに」

言うとおりの眠そうなメロン。

「こつちに行くとなにがあるんだろう？」

「分かんないよ。村から出たことないもん。レオもそうでしょ」
「いらいらしてきたメロン。」

「…」

「…」

「レオー…お腹空いたー」

「…」

「レオー…足痛いー」

「…」

「レオー…眠」

「何か見えてきた…」

「え？」

前方に岩の塊が見えてきて、ふらふら歩いていた人たちが座り込み始めた。

「休憩するみたいだ」

「疲れたー…」

メロンもその場に座り込んだ。

「何だろうここ…」

周りにはあちこちに大きな平べったい石があり、ところどころに石が組み合わさって門のようなものだけが残っている。

「ここって、遺跡じゃないかな…？」

「レオ…。とりあえず…一旦帰らない？この人たち、眠ったり食べたりするのか分からないし…。ミイナとパールさんも心配してるだろうしさ…」

(この人たちがどこに行くのか気になるんだよなあ…。でも、この人たち、息もあまり切れてない…)

「帰ろう…」

「しょうがない。」

「うんうん」

ほっとしているメロン。

「帰りも長いな…」

「…文句言わない」

メロンに怒られた。

遺跡

しばらく歩いて、宿に着いた。もう夜が明けそうだった。

「お、帰ってきたか。無事でよかった…」

「お姉ちゃん、レオー！」

パープルさんとミイナが宿の前に立っていた。

「あー疲れたー…」

おばさん臭く肩を叩くメロン。

「ふう…」

「…」

「…」

「…あの？何か見つかったのか？」

パープルさんに聞かれてはつとずる。ぼーつとしてた。

「あ、ああ、えーつと…街の人たちがいるんな人がいて歩いていつて着いていったんだけどみんな足が速くていや速くはないんですけど街の人たちが遺跡の前でいや遺跡じゃなくてその石がたくさんあるところがあつて…えーつと」

「落ち着いてよ…」

メロンに白い目で見られた。

(説明って苦手なんだ…)

「まあ、街の人たちが遺跡みたいなところに行ったと」

パープルさんは首をかしげてはいるけど、伝わったようだ。

「はい、そうです」

「…また4人になっちゃった…」

石ころを蹴飛ばすミイナ。

「…また誰もいないわけか。とりあえずその遺跡に行ってみようか…」

ため息をつきながらパープルさんが言った。

一旦宿に戻って休息し、八百屋から適当に果物を持ってきて朝食にする。

「こういうの楽しい…。場違いな言い方かもしれないけど」
りんごを食べてるメロン。

「だね」

ちよつと笑う。

「まあ、まず味わえない経験だしな」

パールさんも。

食べ終えて、また出発。

遺跡に到着した。やっぱりみんなどこかに行ってしまったらしく、やけに広く開けた草原になっていた。

「もう一回来てみると意外に近かったね」

苦笑いするメロン。

「結構そういうものだよね…はは」

(…もう誰もいないけど、もっと追えたかもしれない…)

僕も苦笑いする。

「入り口みたいなのがあるな」

パールさんに言われて見てみると、石が組み合わさってできた門の下には下に続く階段が見えた。

「真つく…わ!!」

薄暗い階段を下りていくと突然明るくなりミイナが飛び上がった
驚いてた。

「まだ生きてるな。この遺跡」

パールさんが辺りを見回しながらつぶやいた。緩やかな傾斜とゆるいカーブを描く階段を長々と下りていく。

「きれいな女神だ…」

壁には壁画が描いてあった。

「露出は多いわな」

メロンにはっさり言われる。

「そ、そんなつもりじゃあないんだけど…。いや、そういうつもりももちろんあるんだけど、いやその…」

「…」
ミイナに変な目で見られる。

「まあ、宗教色のある遺跡は少ないよな。工場とか、もっと実用性重視のものがおいから」

「パープルさんが少しだけ助けてくれた。」

（ふう…）

改めて壁画を見る。中央にいる女性がペンダントを天に掲げていて、その周りに何人か武器を持った人がいる。さらに周囲の大勢の人たちがその女性に祈りをささげているようだ。そして壁画の隅々には何かの塔が描かれていた。

（この塔も遺跡なのかな。それにしても…ペンダント？）

「ミイナが首から下げているペンダントに似ている気がした。」

「いつまでジロジロ見てんのー？」
メロンの声が聞こえてきた。振り向くと誰もいない。みんなずっと先に行ってしまった。

「あ、今行くよー」

あわてて着いて行く。階段を下りていくと、彫刻だらけの部屋に着いた。礼拝堂みたいなどころらしい。長イスがたくさんあって、大きな女神像の前に演台みたいなものがある。

「…天井高い」

天井を見上げて感動しているメロン。

「ここにもあるんだ…」
女神像があった。

（やっぱりペンダントしている…）

「今度は肌があんまり見えてなくて残念だったねー」
にたにたするメロン。

「そうじゃなくて…」

（天井見ててよ。今はミイナがいるから、直接言えないし…）

「普通、彫刻の女性は露出多いからなあ。残念だったなー」

（パールさんまで…）

「な、何を調べているんですか？」

（話題を変えよう）

パールさんは隅っこにある本棚から取った本を調べている。

「昔の聖典のようだな…」

「昔の文字読めますか？何て書いてあるんですか？」

「まあ…大まかな内容くらいは。人間の罪の結晶である赤い悪魔に支配されたこの世界に、聖なる島から現れた聖女サマがやってきて、人々を天国に続く塔へと導いてくれますよ…だいたいこんなところだな」

「もう全部読めたんですか？」

「最初に大体のあらすじが親切に書いてあった」

（なんだ）

グウー

「ん？」

音がした方向を向く。

「…腹減って悪いか」

メロンがいた。

「…ごはん食べたいね」

「…ニヤニヤするな」

怒られた。

「ごめんごめん」

謝った。

「手がかりもないみたいだし、一度戻ろうか…」

パールさんはため息をついた。

学者の本

「ミミル：お前最近になって信心深くなったのか？」

午後、大学の図書館で本を読んでいるとギーデットが話しかけてきた。

「まさか……。こんな古臭い本は好きにならないさ……。でも、南に化け物がいて人は寒いところにしか住めないっていうのは事実だ。どこが本当で、どこが嘘なんだろうと思ってさ……」

「昔はやっただけのやつだろそれ？それに、南の化け物は突然変異したコウモリらしいぞ？」

ギーデットはにやついている。バカにしているようだ。

「でもね……。うそ臭いけど、リアルに感じられるところもあるんだこれ……」

「読んでたらそう思うもんだよ。それに、お前なあ、せっかく大学生なんだぞ？もっとこう……。ないのか？何か？」

「お前もな……。俺に話しかけてないで、女でもさそったらどうだ？」

「……それができてれば、お前に話しかけねえって」

ギーデットは笑った。

「何も予定がないなら……遺跡を見にいかないか？」

「見に行つてどうするんだ？」

「……警備員の目を盗んで中に入るんだ……。この聖典さまによると、聖女のペンダントを作った人間がいたらしい」

大学の図書館から歩いて15分ほどのところに小さな石の塊がある。上は崩れているが地下があつてその壁画と聖堂は見学することができる。壁画には宝石を掲げた女性、左右にはずらつと人が描かれていた。

「読んだ聖典さまによると……」ペンダントを持った聖女が現れて、人々を救済の塔へと導いてくれるのでした。めでたしめでたし……」

ていうことだったな」

古い言葉で書かれた読みにくい聖典を確認する。

「…これを見に来たのか？」

ギーデットはいつもどおりやる気がない。

「いいや…あの警備員がいる先が見たい」

聖堂の先には剣を持った警備員が立っていて先に進めない。

「で？どうするんだ？」

ギーデットはなんだか楽しそうだ。

「…どうせ雇われ警備員だろ？教会の人間じゃない…」

「おい、正面から行くのかよ…」

小声の忠告が聞こえてきた。俺は警備員に話しかける。

「すいませんが、中を見たいんですよ。大学の課題にちょっと変わ

ったことを書きたくて…」

「申し訳ありませんが…」

警備員は面倒くさそうに至って事務的な態度をとった。

手を開けて札を1枚見せてみる。

「5分だけ」

「内緒ですよ…？」

扉を開けてくれた。扉の先には長い廊下があった。これまでと違

ってランプも何もなく、俺達のつけたライターだけが明かりだった。

「いくら払ったんだ？」

距離を置いてからギーデットが聞いてきた。

「全然。安い時給なんだろうな、かわいそ」

廊下の先には1つ狭い部屋があった。

「何も無いな、これだけかよ」

ギーデットはもうがっかりしたようだ。

「昼飯代くらいで何かが起こると思っただけさ。この部屋に何か

あっても教会が撤去しているだろうしな…」

壁を叩いてみる。

「回転ドアでも探しているのか？」

「そつだよ」

「…」

「…」

「…回転したか？」

「…いいや…」

「ふん！ふん！ふん！」

全力で壁を押ししてみる。

「…気が済むようにすればいいさ…」

ギーデットは床に座り込んだ。

「ふんぎぎぎ…」

もつと力を込めて壁を押ししてみる。

「こーんこーん」

ギーデットは欠けた石を投げ始めた。石は床を転がり、欠けた床の一部にぴつたりとはまった。

ゴウウウン…

「お？」

壁の一部が持ち上がり、小さな隙間ができた。手を突っ込んでみる。

「何かあったか？」

ギーデットは興奮している。

「…！」

手に当たったものをつかんで連れてくる。

「…本だな」

「俺の手柄だな…ははは」

ギーデットは陽気に笑った。

「ハハッ」

遺跡からの帰り道。手に入った本を読みながら歩いている。

「…いつの間にそんな文字読めるようになったんだ？」

ギーデットが感心しているのか、呆れているような声で聞いてき

た。

「聖典を元の言葉で読みたくて学んでいたからね……」

「で？何か面白いこと書いてあったか？」

「『…400年が経つと聖女の石化が解ける。石化が解けた聖女は街をめぐり、ペンダント型の装置によって人々を救済の塔へと導いていく』だそうだ。で、今年がちょうど400年目。で、『聖女が持つペンダントとは、人を惑わす装置である。ペンダントは夜に光を放ち、その光は周囲の人々を惑わし、救済の塔へと歩ませる』そして、『…救済の塔は太陽の光を集め、数時間に一度周囲を焼き払う…』聖女について行った人たちはかわいそうに焼き払われるわけだ」

「で？何も起こってないじゃないか…こういうのは、ずっと前には騒がれて、いざそのときが近づいてくるとなんにも起こらないし、覚えている人もいないものなんだよ」

ギーデットはやる気ないモードに戻ってしまった。

「暇つぶしにはいいだろ？」

悪魔

街に戻った。寒いけど、天気はいい。

「ふう…」

往復して疲れた。もう昼過ぎだ。

「さて、とりあえず何か食べよう」

パープルさんも疲れたみたいだ。

「うん。お腹すいたー」

ミイナはやっぱり一番疲れてるみたい。雪の上に座り込んでしまった。

「あそこのお店に入らない？」

メロンが指差した先に小さな喫茶店があった。

「そうだね」

足が痛いし、座りたい。

「行こう」

パープルさんも同意。

「さ、行くよ」

座り込んだミイナに手を出すメロン。

「うん」

手をつないで歩き出す2人。

(仲いい。メロンも1人っ子だしなー)

喫茶店はパン屋さんもくつついていて、いろんな種類のパンが並んでいる場所があった。

「わー…!」

うれしそうなミイナ。メロンの手を離してトテトテと歩いて行って、皿を取ってパンを載せ始めた。

「元気になったなー」

うれしそうなパープルさん。

「さ、食べよ食べよ」

僕らもパンを取りに行く。それぞれパンを取って、喫茶店のほうのテーブルに着く。喫茶店の厨房から紅茶も持ってきた。

「あれ！」

いつになく高い声をだしたメロン。

「どうしたー？」

僕は目の前のパンのほうに気が大事。

「人がいる？ような」

その一言で、全員メロンが向いている窓を見た。

「……」

「……」

「……」

「どこ？」

念のため聞いてみる。

「……猫だったかも」

照れ笑いするメロン。がっかりするパープルさん。にっこりしながらメロンの目を見るミイナ。からかっているみたいだ。

コッコッコツ

全員一瞬黙って互いを見る。それぞれがふるふると首を振る。自分たちの音ではない。

チリンチリン……

ドアについている鈴が鳴った。分厚いメガネをかけて、年齢はややおじいさんの人が入ってきて、音の正体が分かった。

「人はまだまだ残っていたのか……」

目を丸くしている。

「君たちも取り残され……」

そこまで言つて、『ややおじいさん』は固まった。僕達も何があったのか分からず止まる。

「そのペンダント……！聖女様……！」

『ややおじいさん』はいきなり跪いた。目には涙まで浮かべてい

る。僕もメロンもパープルさんも、首をかしげながらミイナを見る。
「……ふえ？」

当然どうしてよいか分からないという反応をするミイナ。

「私にも！聖女様を、警護させてください！！」

パープルさんに向かってたのみこむ『ややおじいさん』。

「は、はあ……」

パープルさんも反応の仕方が分からないらしい。

「では！！私は周囲を見張ります！！」
走ってつた。

「……何だつたんだ？」

ぼけつとしながら聞いてくるパープルさん。

「……さあ」

首をかしげる僕達。

食事を終えて外に出る。

「さっきの人は……いなくなったみたいだ」

周囲を見渡しても誰もいないし、人の気配もしない。

「無視していいんじゃない？」

メロンの言葉に全員賛成した。というか真剣に考えている人はいなかった。

とりあえずホテルの部屋に戻って、しばし休憩。

コンコンコン

「レオーまだ寝てるのー？」

ミイナの声で目が覚めた。

（いつの間にか寝てたんだ……）

廊下に出た。

「夕食の時間になってしまいました」

メロンに言われて、納得いった。

（どつりで……暗くなってきたるわけだよな）

「さて……これから街を出るのは無理だし。また適当に何か食べて今

日はのんびりするか」
パールさんが言った。

そしてまた夜。宿でまた1人ベットで寝ている。男は僕一人なので、一人部屋は仕方ない。でも、さすがに昼間寝てたのでなかなか眠れない。天井の様子が気になる。

(こういうのってどうして顔に見えたりするんだろう…)
カンカンカンカン…

「ひ！」

窓を叩く音がした。

(気のせいだ!!!)

寝返りを打って窓と逆のほうを向いてみる。

カンカンカンカン…

(……ああ…怖い…。何も無いって確認できれば大丈夫なんだ。出るはずないって!)

起き上がって、剣を取ってから窓に向かう。

ガシャン!!

「ひいいやあああ!!」

ばらばらと破片が散らばった。そして、毛がたくさんある何かと、赤い丸が2つ見えた。それ以上は確認できず、ドアに向かい蹴破って廊下に出た。

どんだんどんどん!!

「パールさん!! 助けてくれえええええ!!」

「…どうした? そんなに慌てて」

「パールさん!! あ、あ、あ、ああ赤い目が窓割ってがしゃーん…あの窓が毛がたくさんあって」

「落ち着きなよレオー」

パールさんの横からメロンが出てきた。

「怖い夢見たんだね!。お姉ちゃんが一緒に寝てあげようか?」

「からかっている場合じゃないって!!! ほんとにうわっ!!!」

パープルさんが僕の腕を引っ張った。倒れて床に倒れこむ。
キュルルルルル…

振り向くと赤い目をした何かがあった。

「レオーこれ夢ー？」

のんびりした声のメロン。

「夢じゃないって!!」

「下がってる!」

パープルさんが短刀を持って僕達の前に立つ。

「っ!!」

パープルさんが動いた。両手に持った短刀を振る姿が、踊るようで、舞うようで、ゆっくりのようで素早いようできれいだった。暗さで何があったのかはよく分からなかったけど、気がついたら赤い目は消えて床に塊が倒れていた。

「…動かなくなったかな…」

メロンが小声を出した。パープルさんがゆっくり倒れているものに触れた。

「どうやら…倒したようだな…」

息をほとんどしてなかった僕とメロンは、緊張を解いて息を切らして空気を吸った。

「こいつ…なんなんだろう?」

メロンがランプを持ってきたので、明かりを照らしながら恐る恐る近づいてみる。

「うっ…これも目?」

さっきまで赤く光っていた目玉の上にくっつか球体が埋め込まれていた。

「…知ってる?こんな生き物…」

「知らない…」

震えながら答えるメロン。パープルさんも目が泳いではつきり見る先が決まってないようだった。

「知っている…悪魔と呼ばれていて…南に…こういうやつがいて…」

人が住めなくなつたと…何かの本で読んだ…」
パープルさんは肩で息をしているようだ。

朝になつた。悪魔の亡骸のある階で眠るのは怖いので、別な階に移動して、4人部屋で夜を明かした。でも、誰も結局眠らないまま朝になつた。

「…あの1匹だけだつたようだけれど…。さて、食べ物を取つてくる。ここで待つてて」

パープルさんが短刀を持って出て行つた。

「…ミイナ。よつと…結構重いもんだね」

イスに座つたままうとうとしているミイナをベットに寝かせるメロン。

「…遅いなあ」

ここから、商店街までそんなに遠くないはずだ。

「…ちよつと見てくる」

外に出る。パープルさんがこっちに向かって歩いてきていた。

「パープルさん？」

ちよつと表情が暗い。

「昨日の人が…悪魔と…戦つたのかも…」

パープルさんは僕と反対側を振り向いて一言つぶやいた。

「どうしたんですか？」

「とりあえず、あそこの建物の影に運んだ。あとでちゃんと埋葬してあげよう…。ミイナがうっかりそこに行かないようにしてほしい」

「…はい」

何があつたのか分かつた。でも、悲しいのか良く分からない。平気ではない。昨日の人がいなくなつたことよりも、昨日の夜生きるか死ぬかの場面だつたこと、そういうことに首を突っ込んでいること。静かな街が巨大な魔物で、僕達はその体内にいてこれから溶かされていくような、そんな気がした。

不老の薬

シリリリリ…

授業が終わりを告げるベルが鳴り響く。

「冬休みだな」

前の席に座っているギーデットに話しかけた。

「あ、ああ冬休みだ」

「ご予定は？」

「あるわけねえだろ」

「なら…この本の工場に行こう」

「ミミル、お前まだその本読んでたのか…何か面白いこと書いてあったか？」

「何しろ昔の言葉で書いてあるから、まだ読みきれてはいないんだが…。昔むかしに、不老の薬ができていたらしいぞ。さすがに不死にはできなかつたらしいが」

「で？そんなのよくある話だろ」

ギーデットは冷めている。特に他にやることも無いだろうに。

「長い休みの暇つぶしにはいいだろ？その工場はずいぶん南にあるから、長旅になる」

「危なくないのか？南は悪魔だらけの場所だし…。人間は入ってはいけないところだ」

ギーデットの言うとおり、子供のころから南には悪魔が住んでいて、人間が入ってはならないと教えられてきた。実際、人が何か化け物に襲われたという噂も年に2、3回は聞く。俺はオカルトの類だと考えているが。

「…冬だから、悪魔の数は少しはマシになっているさ」

「行ってみつか。…それにしてもなあ…」

ギーデットは渋い表情をした。

「なんだ？」

「大学生つてもつとなあ…。それが男2人で工場見学かよ…」
笑えるほど落ち込むギーデットは面白い。
「ははっ。…行こう」

大学のある街から汽車に乗りこんだ。

「2週間は汽車の旅…そこからは徒歩の旅…。本のとおりだとしたら、何日かかるか…」
うずうずする。

「…ミミル、武器持つてるか？」

「ん？ナイフ1本だけだな。国境でいろいろあると面倒だ。お前は？」

「素手だけ…」

ギーデットは急に不安げになった。

ふと思いついた。

「確かに変だよな…。悪魔は罪深き人間を罰するために現れた…。これはどの宗教でもだいたい同じだ。寒さに弱いつてことは、もともと寒い地方に住んでいた人は悪さをしてなかったってことになる…」

「そう言っただけでいるやつらもいるしな…」

ギーデットはまだ武器のことを心配しているようだ。

「…」

窓から見える家々は目を追うごとにみすばらしいものになっていき、さらに日が経つとまばらになり、ついにはなくなった。

「駅しかねえ…」

2週間後、ようやく終着駅に着いた。長旅で疲れていたギーデットは、汽車を降りるときは元気を取り戻したが、駅から出るとまた落ち込んだ。

「とりあえず…宿探しと、食料を買わないとな」

「こっからは徒歩かよ…」

ギーデットはうんざりしてきている。ここからがいいところだろうに。

歩き始めて1時間。

「しっかし…何にも無いな…」

ギーデットの言うとおり、何も無い。いくぶん南にいるためか雪がまばらで歩きやすい。

「この地面…本当にまっ平らだな」

まっ平らな黒い道が見渡す限り続いている。黒い道はどこどころにビビが割れたりしている箇所もあるが、基本的に平らだ。

「…ミミル、あれって車ってやつじゃないか？」

道の脇に小さな黒い車があった。

「ん？ああ、動くかな」

駆け寄って乗り込んでみる。

「動かし方分かるか？」

そう言うギーデットは真っ先にハンドルの無い席に座って待っている。

「分かるわけないだろ？…でも動かせそうなものは少ないから、全部試せばいいか」

フイイイイイ…

何か分からないが動いている音がする。

「お……うまく行きそうだぞ、うわ!!」

「何だ!？」

突然体がイスの背もたれに押し付けられ、景色は吹っ飛んでいく。つまり動いている。

「おお!!すげえ!!自動車なんかよりずっと早いぞ!!」

ギーデットは窓から顔を出してみたり、正面、左右、後ろの窓を見比べたりしている。

「振動もない…。昔はこんなものが飛び交っていたのか…」

俺も感動した。

2日後。周りは建物の残骸と、無事な建物が混ざった状態になった。

「降りてみないか？」

「ああ」

悪魔が怖いからと車からほとんど降りなかったギーデットが自分から提案して急いで降りた。

「古代の街だったんだな…ずいぶん壊れているが…」

ギーデットの興奮は一瞬で冷めたようだ。周りは建物の残骸だらけ、無事な建物があってもこれだけ人気が無いと墓石のようで不気味さを強調するだけだ。更に進んで、街の中心部であったらしき場所に来た。と言っても残骸が巨大になったただけだが。

「寂しいな…」

ギーデットがつぶやいた。

巨大な残骸や建物は、迫力はあるが時間が止まっていて動かない。

「…当たり前だけど…誰もいないな…」

「でも、確かに人はいた」

「うえ…骨？」

俺の見るほうを見てギーデットは震えた。人の骨があった。ギーデットが気づいていないだけで、前からところどころにあっただが。

「大部分は逃げて…俺たちの先祖になったのだから…。逃げ遅れた人は食われて亡くなった…」

「悪魔のせいかな？」

ギーデットはさらに震えている。俺の言葉でさらにおびえたか。

「たぶんな？」

キュルルルル…キュルルルル…

「？」

無言でお互いを見て、周りを見る。ふと、空を見ると、黒い翼があった。それはどんどん大きくなる。赤い物があり、それと俺の目があった。遠くて分からないが、それは確かに笑った。

「う…笑って…る」

ギーデットも同じ感じを受けたらしい。

「…!!車に戻るぞ…!!」

「ひいひい…!!」

走って走って車に戻り、すぐに発進させる。

「帰ろうぜ!!もう人が入ってはいけないところなんだ!!俺は食われたくない!!」

ギーデットは取り乱していた。

「本が正しいならもう少しで黄色い工場が見えてくるはずだ…それを確認できたら、聖典の嘘が分かる…信じられるか?この本こそが真実だ…」

「俺達は…罪を犯しているんだ…」

ギーデットの耳に言葉が届いていないようだ。

「ギーデット…罪は俺の罪だ。お前は着いてきただけだ!!…!おい!あれじゃないか?」

遠くには巨大な黄色い建物が見えた。

「降りるのか?」

車を止めて降りようとする俺を止めようとする。

「…ああ、確認しないと。ここで待っていても」

「行くさ…一人のほうが怖い…」

2人で敷地に入る。建物がたくさんあって、この工場の敷地だけで街のようだ。本を取り出し、地図が乗っているページを探す。

「一番大きい建物の、地下3階だ…そこに不老の薬があると書いてあった。本当なら俺はこの本を信じる」

地図どおりの建物に入り、地下に降りる階段を探す。

「暗い…人のいない建物って気持ち悪いよなあ…」

ギーデットはすっかり怖気づいている。

「…肝試しを思い出すよな」

階段を見つけて下りて、地下3階に着いた。ずっと暗い廊下が続

き、突き当たりに黒く大きなドアを見つけた。

「暗くて息が詰まりそうだ……。ところで、これって開けるのか？」

ギーデットの言うとおり、ドアに開ける取っ手はない。

「本には…数字が書いてある。これか？」

ドアのノブがある位置に数字が並んでいる四角い箱がくっついていた。

ピピ……ウイイン……

数字を押すと、ドアはゆっくりと開いた。

「開いたな…入ろう」

「お前は元気だな…俺は逃げ出したいよ」

ギーデットを無視してドアを開けた。さらに地下に向かって伸びている白い塔のようなものの周りに階段がらせん状についていて、ドアを開けて続いている通路と繋がっていた。

「…何をやっているんだろうなあ…」

ギーデットはどこまで地下に続いているか分からない塔を見下げながら、ぼんやりとした声で呟いた。本を取り出して記述を探す。

「ずーっと奥に倉庫がある…。そこに…黄色い薬品があつて、それが不老の薬だ…」

塔を横目に見ながら通路を歩いて、塔を挟んでドアと反対側にさらに進む通路があつた。全く分からない管だらけの装置や書類の山瓶だらけの棚などを横目に見ながら奥へ奥へと進んでいく。突き当たりにはまたドア、それをまた数字を押して開ける。そこには巨大な棚があり、透明な瓶に入った黄色い薬が並んでいた。

「あつた…」

俺は走って棚を開け、カバンに入るだけ瓶を詰めた。

「それ…飲んで不老になるのか？」

ギーデットは俺に少し引いたようだった。

「いや、飲まないな…。こういうのは自分だけ使っても不幸になるもんだ」

もう一度本を開いて確認する。

「どうした？早く戻ろうぜ」

ギーデットは落ち着かない様子だ。

「…まだ何かあるみたいだ。この本の書き方の感じだと、こっちのほうかメインみたいだ…」

並んだ棚の奥にまたドアがあった。

「これ終わったら帰ろうな？」

ギーデットは帰りたがっている。

「ああ」

ドアを開ける。灰色の部屋で天井は低く、さらに薄暗くて息が詰まりそうなおところだった。

「いかにもって…感じの…開けるのか？」

部屋の真ん中には、ギーデットの言うとおりの弁当箱サイズの怪しい鉄の箱があった。

「……開けよう。まさか爆弾じゃ…ないだろう」

蓋には鍵もなかったので、つかんで上に引き上げるだけ。

パン…！！

「ぐっ！！」

何かが破裂したような乾いた音がして、一瞬目の前がフラッシュした。しかし、それだけだった。

「…中には何も無いのか…。ギーデット？」

いつの間にかギーデットはドアの後ろまで下がって棚の影からこちちを見ていた。

「もう帰ろう…！！」

「…そうだな、帰ろう」

車に戻った。

「うわあ！！」

ギーデットが叫んだ。

「どうした？…さっき捕まえてきたねずみだ。この種類のねずみは3ヶ月くらいで寿命が来る…こいつにさっきの薬を飲ませる…どの

くらい生きれるか調べないとな」

1年が過ぎたある日、俺の部屋に来ていたギーデットが突然聞い
てきた。

「そういえば、あのねずみはどうなった？」

「…覚えていたか、まだ生きてるよ」

かごをギーデットの前に出す。

「う…」

「このねずみ、寿命は長くて3ヶ月だそうだ。捕まえたときの年齢
は分からないが、生まれたてじゃあなかった。個体差があるだろう
けど、さすがに4倍以上も生きないと思う…そんなに丁寧に育てた
わけでもないしな」

「死なないのか？」

「歳を取らないだけ、と本に書いてあった…だから、潰せばたぶん
お亡くなりになる。さてと、この本はでたらめではない…となると
これも本当だ。』…400年が経つと聖女の石化が解ける。石化が
解けた聖女は街をめぐり人々を救済の塔へと導いていく』」

「で？」

「今年がちょうど400年後だ」

「何も起こってないじゃないか…」

「……確かにな」

すり替え

「これからどうしようか？」

誰に聞くというわけでもなくつぶやいた。今は宿に戻って、また八百屋の果物を食べている。

「早めに別な街に向かったほうがいい。人気がないと、また昨日の化け物が出てくるかもしれない……」

パールさんは深刻そうな顔だった。

「さ、早いところ近くの街に行こう」

明るい顔を作るパールさん。目は暗いけど。

ホテルを出る。

「……ちよつといいかなー」

手を自信なさげに挙げるメロン。

「どうした？」

「ちよつと……なんというか必要なもの……というかが……が、あってさ」
パールさんの問いにさらに自信なさげなメロン。

「まあ、いいか。行こう」

ぞろぞろ歩き出す僕達。やや焦り気味のメロン。

「……宝石屋か……」

がっかりするパールさん。メロンは宝石屋の窓側に並んでいる商品を眺めてはりついていて。指輪かなにかを眺めているらしい。

「盗むなよ……？」

「はい……」

パールさんに言われても、名残惜しそうに、ちらちら見ている。

「お姉ちゃん……」

「だ、大丈夫だって、盗まないから。そんな目で見ないでって。さ、行こう行こう？」

ミイナに寂しそうな目で見られてさすがに焦ったらしく、窓から

離れた。

「…近くの街ってここからどれくらいなんですか？」
地図を見ているパープルさんに話しかける。

「ああ、徒歩でも割と時間はかからないはず…西に…。メロンは？」
「さっきの宝石屋さんかも…」

「…やつぱり盗む気なのか？」
呆れた声のパープルさん。振り返って戻ろうとすると、
「あ、来たよ？」

ミイナが声を上げた。向こうから走ってきた。
「いやいや、お待たせお待たせ…。もう一目みようとしてたら、みんな行っちゃっててびっくりした！。じっと見てたら誰もいなくなつてんだもん。びっくりして走って…」

このメロンの顔。同じことを繰り返す言動。焦ってる感じがする。焦っている理由は、こっそり盗ってきたからとしか思えない。

「…もしかして、盗んできたのか？」
「いいーえー!!」

パープルさん聞かれて元気に答えるメロン。僕には、この顔は盗つてきた顔にしか見えない。

「…ま、まあ、信用する」
少しくらいならまあいいか、という感じで諦めたらしいパープルさん。

「はい!!」
「やった!という顔のメロン。」
「さ、出発しよう」

パープルさんはまた気合を入れなおしたみたい。

次の街まで、汽車の駅も当然無人だから徒歩。
ザクザク…

雪を踏む音しか聞こえない。

「次の街は誰かいるかなー？」

ミイナがみんなに聞いてきた

（いると思う…。ミイナが今一緒にいるから・・・思い込んじゃだめだけど・・・でも）

そう思いながらも、

「うん。いるよきつと」

と答えた。

「いい加減、にぎやかなところ行きたいよねー」

愚痴っぽいメロン。

「そうだな。人がいれば、また事情を話して、探してもらって…。

今度こそ解決するさ」

解決しそうにないということを隠していることが分かる顔のパールさん。

数時間歩いた後。

「あ。街だー」

僕に負ぶさっているミイナが声を上げた。距離が長いので交代で

ミイナを負ぶっていた。

「ああ、やっと着いたー」

足をとんとん叩くメロン。

ザクザク

「あ、誰か来た！」

街からぞろぞろ人がこっちに向かって走ってきているのが見えた。

「…ふう…」

（人がいた…これで解決すればいいな…。退屈してたけど、村に戻りたいよ）

前の街と同様に、領主さんのお金で宿に泊まっている。前と同じように僕は1人部屋。少しさびしい。

また領主に説明しに行ったパールさんによると、異変に気付い

て前にいた街に人を遣っていたらしいがすれ違いになっていたようだ。

ドンドン

「レオ？入るよ？」

こつちが返事をする前にメロンはずかずか入ってきた。

「何？」

「んー、パープルさんはまだ忙しそうだし、ミイナは寝ちゃったしさ」

「で…街で見てたペンダントさ…盗んだの？」

どうせ盗んでないと答えると思う。

「いいや？」

(やっぱり)

「まあいいや…それよりさ…遺跡で見た壁画にも…ミイナが持っていたペンダントがなかった？突然出て来たおじいさんには聖女様って呼ばれて…」

「…レオもそう思う？」

(僕だけがそう思っていたんじゃないかなかったんだ)

「考えちゃいけないことなのかもしれないけど…ミイナを洞窟で見つけて…ミイナがペンダントを手に入れて、それから、村の人がいなくなつて…。ミイナのせいじゃないかって…さ」

(僕は…今いけない考えを持っている…と思う。でも…)

「…」

「…」

「…レオ。私さ」

メロンはポケットに手を入れる。ポケットから出したのはさっき眺めていたペンダントだった。

「…盗んだの？」

「盗んだの」

「メロン…」

「そんな目で見ないでって。このペンダントを、ミイナの持ってる

やつとすりかえて、そして、ミイナの様子を見てれば分かるんじゃない？」

「確かに…このペンダント、ミイナの持ってるやつと似てる。…ちやんと考えてたんだ。ただ盗もうとしてたのかと」

「まったく…」

むっとするメロン。

ドンドン…

「はい」

「ちよつと入るよ」

パールさんだった。

「あ」

ペンダントを持っているメロンが固まった。

「やっぱり…」

パールさんは怒っている感じではない。

「盗んだのは…盗んだんだけど…あの」

慌てるメロン。

「で？何か理由があるんだろ？」

「え？あ？はい！！」

「あの…」

メロンがさっきの僕達のやり取りを説明した。

「…なるほど…じゃあ、私がすり替える…」

パールさんも気乗りはしないみたいだ。でも、考えていることは同じだったみたいだ。

「メロン…ばれたらさ…自分だけ逃げないでよ？」

ふと気になったのでメロンに確認する。

「当たり前でしょ。逃げるに決まってない」

「え？」

（言葉がおかしい。逃げるに決まってるって言おうとしたんじゃないか。）

「逃げない逃げないって。一緒に謝る？そのときは」

笑うメロン。

「私も謝るさ……」

パープルさんもちょっとだけ明るい顔になった。

夕食に出かける。パープルさんが僕とメロンに軽く頷いて合図した。僕とメロンも返した。

(…すり替えれたんだ)

夕食は久しぶりにちゃんとした料理人が作った料理を食べれた。

(でも、正直不安だ…)

ミイナがおいしそうに食べているのを見て辛くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4133x/>

氷の村とミイナ

2011年12月25日00時46分発行